

# 『日本誌』及び『オックスフォード英語辞典』の双方に現れる日本語(3)

## Japanese Loanwords That Appear in Both Kämpfer's *the History of Japan* and the *Oxford English Dictionary* (III)

土居 峻\*

Schun DOI

### Abstract:

In my paper published in the book *the Future of English Studies* (2010), I have mentioned of 74 Japanese loanwords that could be found in both *the History of Japan* and the *Oxford English Dictionary*. I have begun to list these words in the 2011 issue (Vol. 46) of this Bulletin, and continued in the previous issue (Vol. 47). However, it was not possible to list all 74 words due to spatial limitations. Thus, I will here continue the list in alphabetical order, together with some explanations for each of the Japanese loanwords. This paper will conclude my list of 74 words.

### 1. はじめに

拙稿 (2010: 92) において、E. Kämpfer 著『日本誌』*the History of Japan* (1727 年初版) 及び『オックスフォード英語辞典』*the Oxford English Dictionary* (以下、OED と略記する) の双方に見られる日本語は 74 語あることを指摘した。前 2 稿 (2011, 2012) では、それぞれの語に簡単な説明・解説を加えながら、その一覧を掲げた。しかし、ページ数の制約のため、全ての語に解説を付けられた訳ではない。ここに、その続きを掲載していく。

OED の各版の名称に関しては、前 2 稿に続き、初版 (1928 年)・*Suppl. 1* (1933 年)・*Suppl. 2* (1972 年～1986 年)・第 2 版 (1989 年)・*Additions Series* (1993 年、1997 年) を用いることにする。

### 2. 前稿までに紹介した語の一覧

前 2 稿で紹介することができた 53 語を以下に一覧しておく。括弧の外が『日本誌』の綴り、中が OED の綴り、それに続いて対応する日本語である。

1. *Adsuki (adzuki)* 小豆
2. *Awabi (awabi)* 鮑
3. *Bon (Bon)* 盆
4. *Bonze, Bonsey (bonze)* 坊主・凡僧

5. *Cango (kago)* 駕籠
6. *Cobang, Cobanj, Copang, Kobani, Kobanj, Koobang, Cubang (kobang)* 小判
7. *Daimio, Dai Mio (daimio)* 大名
8. *Dairi (dairi)* 内裏
9. *Finoki (hinoki)* 檜
10. *Firo Canna (hiragana)* 平仮名
11. *Goradzi (Rōjū)* 老中
12. *Itzebo, Itzebe, Itzebi (itzebu, itzeboo)* 一分
13. *Jamatto (Yamato)* 大和
14. *Jedo (Yeddo)* 江戸
15. *Jetta (Eta, eta)* 穢多
16. *Kaja, Kai (kaya)* 榧
17. *Kaki (kaki)* 柿
18. *Kami, Cami, Came (kami)* 神・守・上
19. *Kanno, Canna (kana)* 仮名
20. *Katanna (katana)* 刀
21. *Katsuwo (katsuo)* 鰹
22. *Kattakanna, Catta Cana (katakana)* 片仮名
23. *Kin, Ikin (ken)* 間
24. *Kiri (kiri)* 桐
25. *Kirin (kirin)* 麒麟
26. *Koi (koi)* 鯉
27. *Koitsjaa (koi-cha)* 濃茶
28. *Kokf, Koku (koku)* 石
29. *Konjakf (koniak, koniaku)* 蒟蒻
30. *Kuge (Kuge)* 公家

\* 愛知工業大学基礎教育センター非常勤講師

31. *Matsuri, Matsusi (matsuri)* 祭
32. *Midsu (miso)* 味噌
33. *Mikaddo, Mikaddi (Mikado)* 帝
34. *Mome, Mom (momme)* 匁
35. *Moxa (moxa)* 艾
36. *Nipon, Nifon (Nippon)* 日本
37. *Norimon (norimon)* 乗物
38. *Obani, Ubang (obang)* 大判
39. *Rinsaifa (Rinzai)* 臨濟宗
40. *Rissiu (Risshu)* 律宗
41. *Rit (Ritsu)* 律宗
42. *Riuku, Liquejo, Liqueo, Leuconia (Ryukyu)* 琉球
43. *Liqueans, Liquejans (Ryukyuan)* 琉球人
44. *Saquer (sakura)* 桜
45. *Sake, Sackee, Saki, Sakki, Sacki, Sacchi (saké)* 酒
46. *Samurai (samurai)* 侍
47. *Sasanqua (sasanqua)* 山茶花
48. *Sasen (zazen)* 坐禪
49. *Satori (satori)* 悟
50. *Sen (Zen)* 禪
51. *Senni (seni)* 銭
52. *Sennin (sennin)* 仙人
53. *Seogun (shogun)* 將軍

### 3. 『日本誌』と OED との双方に現れる日本語

さて、54 語目以降は前 2 稿の形式に従い、説明・解説を加えていく。項タイトル中、括弧の中が OED の綴り、外が『日本誌』における綴りである。なお、項番号は、前 2 稿からの通し番号とする。

#### 3・54 Siakf, Sak, Saku, Sakf, Sackf (shaku)

尺。尺貫法の長さの単位。「度量衡取締条例」(明治 8 年太政官達第 135 号)では基準尺度とされたが、「度量衡法」(明治 24 年法律第 3 号)においてメートル法と併記され、 $10\frac{1}{33}$ センチメートルと規定された。後にメートル法に統一する改正も行われたが(「度量衡法中改正法律」大正 10 年法律第 71 号)、勅令等による施行延期が相次ぎ、「昭和 14 年勅令第 18 号」によってメートル法以外の単位の使用は 1958 年(昭和 33 年)までと定められるまでこの状況は続いた。旧「計量法」(昭和 26 年法律第 207 号)はこの期限前の制定であるが、尺貫法に関する規定はない。つまり、尺貫法はこの時点で廃止されたことになる。勿論、現「計量法」(平成 4 年法律第 51 号)にも規定はないが、歴史的・伝統的な事項において尺貫法を用いる場合の換算は、今でも「度量衡法」の  $10\frac{1}{33}$ センチメートルが使われて

いる。

OED には 7 つの用例文が挙げられており、その初めの 3 文が『日本誌』からの引用である。“One Sackf and a half long.” [1 尺半の長さ。]、“Snow..to the height of four Sak and five Suns, that is about four foot and a half.” [4 尺 5 寸、つまり、約 4 フィート半の深さまで雪が降る。]、そして “His Stature..of nine Saku, and nine Suns, proportionable to the greatness of his Genius.” [彼の非凡な才能に見合った 9 尺 9 寸の身長。] である。

OED には別の語義も提示されているが、これは全く別の単語とすべきものである。同音のため、混同したのだろう。その語義は、「笏」であり、束帯の装束を身に着ける際に右手に持つ細長い板のことである。『大辞林』(1995)によると、初めは備忘用として文字を書いた紙を裏に貼っていたものが、後に儀礼用となったのだという。この語義としては、“‘Twas the Emperor’s whim That the tree should from him Have a shaku with Ta-iu writ on.” (F. V. Dickins trans., 1876, *Chiushingura, or, The Loyal League: A Japanese Romance*) [その木には太夫と記された笏を与えるというのが帝の思召しである。] が初出である。東京成徳英語研究会 (2004: 354) によると、これは謡曲『高砂』の一節で、にわか雨に遭った始皇帝を救った松に「爵」が与えられた場面であるという。Dickins の解釈上の間違いであろうか。

#### 3・55 Singon (Shingon)

真言宗。8 世紀に中国から伝来した密教仏教の一派で、平安時代に興隆した。また、東京成徳英語研究会 (2004: 373) は『大辞林』から引用して、日本語の「真言」には「仏・菩薩の誓いや教え・功德などを秘めているとする呪文的な語句」の意味もあり、これも OED に記載すべきであると指摘している。しかし、OED は英語での語の使用について記述するものであるから、この指摘は当たらないだろう。

OED には *Suppl. 1* で採録されており、第 2 版にもそのまま引き継がれている。用例は 8 文が挙げられ、その初例は『日本誌』より “In the 1850 streets of this city, there were..10070 of the sect Singon.” [1,850 あるこの都市の街路に、真言宗の者が 10,070 人いた。] である。これは、Ritsu の参考例 (3・41 項参照) と同じ部分からの抜萃である。

#### 3・56 Sinto, Shinto (Shinto)

神道。OED には「日本固有の宗教体系で、その中心を為す思想は、帝が天照大神の後裔であり、帝に帰一すべき服従が暗に含意されるとする」とある。これは戦前・戦中

の国家神道においてはその通りであるが、「神道」の実態を遍く捉えているかと云えば、怪しい。その実態は、自然崇拜、祖先崇拜、精霊信仰、古代神話などが様々に絡み合い、習合したものである。OALD<sup>8</sup> (2010) には “a Japanese religion whose practices include the worship of ancestors and a belief in nature spirits” [祖先への崇拜と自然への信仰を構成要素の一部として含む日本の宗教] とある。

OED には初版から採録されており、用例文は全部合わせると 14 例が挙げられている (名詞 5 例、限定詞用法 6 例、形容詞 1 例、「神道信者」としての拡張用法 2 例)。そのうち初例は『日本誌』より “Sinto..is the Idol-worship, as of old established in the Country.” [神道は偶像崇拜であり、彼の国では古く確立しているものである。] であるが、他にも限定詞用法として “The whole System of the Sintos Divinity.” [神道的な神格の全体系。] と “The Sintosju or adherents of the Sintos Religion.” [神道衆つまりは神道宗教の信徒たち。] の 2 例が『日本誌』から挙げられている。

派生語も幾つか挙げられており、Shinto はある程度英語に定着していると言えるだろう。

### 3・57 Sintoist (Shintoist)

神道者。OED においては前項 Shinto の派生語として採り上げられている。

用例文は 3 例、初例は『日本誌』より “Orthodox Sintoists go in Pilgrimage to Isje once a year.” [正統派の神道信者は年に一度、伊勢詣に出かける。] である。Shinto や Shintoist は『日本誌』に多く出現する借用語であり、宗教や年中行事についての説明に目立つ。また、旅行記にも多く見られる。

### 3・58 Siodo (Jōdo)

浄土宗。日本における浄土仏教の一宗派で、阿彌陀仏の本願に頼り、念仏を唱えることによって極楽往生できると説く。総本山は京都の知恩院。また、阿彌陀仏の坐す西方極楽浄土 (欲望や苦しみのない世界) をも指す。

浄土宗の国際版ウェブページ ([http://www.jodo.org/js\\_inter/temples\\_hw.html](http://www.jodo.org/js_inter/temples_hw.html)) によると、同宗はハワイにも信徒が多く存在し、米国本土とブラジルにも寺院を有している。

OED には *Suppl. 2* から採録され、定義は「a. 阿彌陀仏への絶対なる信仰と阿彌陀の名を念ずる決まった呪文を絶えず唱えることによる救済を説く日本仏教の宗派。b. 仏教の信仰における天国のひとつ。特に、阿彌陀仏の坐す西方浄土。」となっている。用例文は 6 つ挙がってお

り、その初例はこれも『日本誌』から “Zealous persons, chiefly the followers of the Sect of Siodo.” [その大部分が浄土宗の信徒である熱狂的な人々。] である。

### 3・59 Soeju, Soje, Soja (shoyu, shoya, soy, soya)

醤油。大豆と小麦で造った麴を塩水に仕込んで醗酵熟成させ、搾った黒茶色をした日本独特の調味料。OED の定義には「主に日本、中国、インドで大豆から造られるソースで、魚などに付けて食べられる。」とある。

OED では shoyu, shoya, soy, soya と 4 つの見出し語に分かれてしまっているが、これらは同語の異綴と考えて良いと思われる。古くはオランダ語を通してヨーロッパに紹介され、その発音や訛が英語にもたらされた時、様々な綴りが生まれたのである。用例文は shoyu に 6 例、shoya に 1 例、soy に 23 例、soya に 16 例と多く挙げられており、これに派生語の soybean や soya bean の用例を加えると 68 例にも及ぶ。その初例は、soya の下にある “Mango and saio are two sorts of sauces brought from the East Indies” (J. Locke, 1679, directions for some foreigner about to visit England; reprinted in P. K. King, 1830, *The Life of John Locke: With Extracts from His Correspondence, Journals, and Common-Place Books*, New ed.) [マンゴーとシャーヨは東インドからもたらされた 2 種類のソースである。] である。この「シャーヨ」が醤油のことと思われる。

『日本誌』では、日本の農産物や輸出品の説明、また、旅行中に供された食事の描写に見られる。OED にも “What they call Soeju, is also made of it, which is a sort of an Embamma, as they call it, which they eat at meals to get a good Stomach.” [彼らが醤油と呼ぶそれは、彼らに云わせればソースの一種であるが、その醤油もこれ (大豆) から造られている。そして、食慾をそそるために食事と共に食す。] が『日本誌』から用例文に挙がっている (shoyu の初例)。

### 3・60 Sotofa, Sotosju (Soto)

曹洞宗。禅宗の一宗派で、9 世紀に中国で興ったが、日本には 13 世紀に道元禅師によって伝えられた。総本山は福井県の永平寺と神奈川県の (元は石川県) の總持寺である。只管打坐 (しかんたざ) (身を正してひたすらに坐ること) と修証一如 (しゅうしょういちにょ) (坐禅の気持ちで日々を真摯に生きること) とを旨とする (曹洞宗宗務庁 1992: 84-85)。

OED には *Suppl. 2* から採録され、5 つの用例文が挙げられている。初例は “Dōgen introduced the Sôtō sect, 2176 after Buddha, or 1227 A.D.” (S. Kuroda, 1893, *Outlines of the Mahâyâna as Taught by Buddha*) [道元は仏滅

紀元 2176 年、つまり、西紀 1227 年に曹洞宗をもたらした。] である。

『日本誌』には 1 回だけ使われている。長崎所在の仏寺についての記載で、“*Kataisi, is the chief convent and temple of the Sensju, or Sect of Sen, which is of the order (or rather Schism) of Sotofa, or Sotosju.*” [皓台寺は禅宗の主要な僧院及び寺であり、曹洞派又は曹洞宗という教団（寧ろ分派と謂うべきか）に属す。] とある。この例文における「派」や「宗」は接尾辞のようなものであるから、『日本誌』の *Sotofa* と *Sotosju* は借用語 *Soto* の例と見做すべきであろう。つまり、OED の初出から一気に 170 年近くも遡れることになる。

### 3・61 Sugi, Suggi (sugi)

杉。ヒノキ科スギ属の常緑針葉樹で日本固有種。特有の芳香を有し、古来より重要な木材として重宝されてきた。春になると多量の花粉を飛ばし、花粉症の主因の一つである。漢字表記では「相」も同義であるが、こちらは国字であり、他国では使われない。

OED には *Suppl. 2* で採録され、その定義にはごく簡単に“= CRYPTOMERIA”とあるのみであるが、これで誤りない。一般的には、日本の杉を表すのに *cedar* や *cypress* の語を用いることも多い。*cedar* は本来、マツ科ヒマラヤスギ属の木々を指すのだから、これを用いるのは植物学的には誤りである。*cypress* はヒノキ科の総称であるから、こちらは然程の問題はないのかもしれない。

OED には 6 つの用例文が挙げられており、その初例には“**1727** [see HINOKI]”とあり、その意味は「hinoki の見出しの下にある 1727 年の用例を見よ」ということである。このような表記は、省略符の「..」と共に、書籍版における紙面上の制約を少しでも克服するために考え出されたものであろう。当の用例文は『日本誌』より“*Finoki and Suggi are two sorts of Cypress-trees, yielding a beautiful light whitish wood.*” [檜と杉とはヒノキ科樹木の 2 種であるが、これらからは美しい淡黄色の材木が得られる。] である。

### 3・62 Sun, Sum (sun)

寸。尺貫法の補助単位の一つで、尺の  $\frac{1}{10}$ 。メートル法に換算すると約 3.03 センチメートル、ヤード・ポンド法では約 1.19 インチ。

OED には *Suppl. 2* で採録されている。用例文は、前項と同じ表記法が使われている初例の“**1727** [see SHAKU]”を含め、3 つが挙げられている。その 1727 年の例に該当するものは、実は 2 例あるので、*sun* の用例は全部で 4 つ挙がっていることになる。1727 年の 2 例については、既

に本稿の 3・54 項 (Siakf, Sak, Saku, Sakf, Sackf (shaku)) で挙げているので、そちらを参照されたい。

### 3・63 Tai, Tah (tai)

鯛。スズキ目タイ科の魚の総称であり、狭義にはその中でもマダイを指す。本州中部以南の沿岸に分布する。体色は赤いものが多く、語呂が合うことから「目出度い」魚とされ、祝いの膳などにも饗される。また、その美しい姿と味の良さから、日本では魚類の王とされる。

OED には *Suppl. 1* から採録されている。*Suppl. 2*・第 2 版で改訂があり、最終的に用例文は 6 例である。その初例は“*Dried fish lyke a breame, called heare tay, in abundance.*” (R. Cocks, 1620, letter; printed in 1883, *Diary of Richard Cocks, Cape-Merchant in the English Factory in Japan, 1615–1622: With Correspondence*) [ここでは鯛と呼ばれている *breame* のような干魚、それも大量。] である。*bream(e)* はタイ科の魚の総称である。

第 2 例が『日本誌』からの引用であり、“*Tai, is what the Dutch in the Indies call Steenbrassem. This is very much esteem'd by the Japanese as the King of Fish.*” [鯛は東インドのオランダ人が *Steenbrassem* と呼んでいるものである。日本人には魚の王様としてとても重宝されている。] とある。これは日本の海産物の説明中に見られる記述で、『日本誌』にはこの他、祭りの描写や旅行中に饗された食事の説明にも見られる。図版にも鯛の絵があり、その説明にも *Tai* とある。

### 3・64 Tanabatta, Tannabatta (Tanabata)

七夕。日本で行われている星祭で、五節句のひとつ。中国で行われていたものが 8 世紀に伝来し、日本において変化してきた。7 月 7 日に行われるが、新暦では雨の多い時期であり、あまり星空は期待できない。一方、旧暦では、星空の綺麗な時期となる。仙台や湘南の七夕祭は有名である。

ちなみに、五節句とは正月、上巳、端午、七夕、重陽の 5 つを指す。(これらが何を指すか解らない方は、是非ご自分で調べてみて欲しい。) 正月は、本来は「人日の節句」であったが、それがいつか拡張され、新年行事全体を節句と見做すようになっている。

この語は *Additions Series* で初めて採録され、定義は「毎年 7 月 7 日に行われる日本の祭り(本州北部の仙台のものが最も有名である)で、天空の恋人である織女と牽牛を讃美し、機織りやその他の手芸の才が授けられるようにと祈るもの。」となっている。5 つの用例文が挙げられており、その初例は“*This festival is called the tanabata or seiseki festival.*” (I. L. Bird, 1880, *Unbeaten Tracks in*

*Japan*) [この祭りは「たなばた」または「せいせき」の祭りと呼ばれている。] である。「せいせき」は 東京成徳英語研究会 (2003) が指摘する通り、「しちせき」の誤りであろう。また、1727 年の『日本誌』と比べると、随分と新しい文献からの抜萃である。

『日本誌』には 2 回登場している。両方とも旅行中にケンペルが見た祭りの描写の中である。1 例目が “The fourth great yearly Festival is call’d *Sissiguatz Nanuka*, because of its being celebrated on the seventh day of the seventh month. They give it also the name of *Sisseki Tanabatta*, which implies as much, and *Tanomunoseku*, which is as much as to say, an *Auxiliar Festival*.” [4 つ目の節句は文月七日に行われるので「しちがつなぬか」と呼ばれている。彼らはこの祭りを同じ意味で「しっせき たなばた」、また、使用人の節句の意味で「たのむのせつく」とも呼んでいる。] であり、2 例目は “On the 1st of August, was celebrated the festival *Tannabatta*, as they commonly call it, otherwise *Siokuso*.” [8 月 1 日には、彼らが七夕または織女と呼び慣わしている祭りが行われた。] である。ケンペルが言葉のわからない中で様々な文化的・社会的事項を総合的に理解しようと腐心した跡が見て取れるようである。

### 3・65 Tendai, Ten Dai (Tendai)

天台宗。大乘仏教の宗派のひとつで、日本では平安時代の初期に最澄が比叡山に延暦寺を建ててから広まったとされる。法華経を根本經典とし、密教色が強い。延暦寺が「古都京都の文化財」の一部として「世界の文化遺産及び自然遺産の保護に関する条約」(平成 4 年条約第 7 号)に基づく世界文化遺産に登録されたのは 1994 年のことである (18COM XI.3)。

*Suppl. 2* から採録され、「最澄によって中国から日本にもたらされた仏教の宗派。智顗 (ちき/ちぎ) によって創始されたもので、緻密な祭式・道徳的理想主義・哲学的折衷主義によって特徴づけられている。」と定義されている。6 つの用例文が挙げられており、その初例は『日本誌』より “Not far from this hot Bath is a Monastery of the sect of *Tendai*.” [この温泉からあまり遠くない所に天台宗の僧院がある。] である。

### 3・66 Tokko (toko)

床 (とこ)。「床の間」の省略形である。日本建築の座敷に見られる座敷飾りのひとつ。床を一段高くし、掛軸・置物・活花などを飾る。中世の書院造とともに形成され、近世初期の数寄屋風書院とともに発達した。日本の住宅ではよく見られたものだが、最近では住宅環境の変化で和室や

客間が少なくなるとともに床の間が取り付けられることも減っている。

OED には *Suppl. 2* で *tokonoma* の異形として採り上げられている。6 つ挙げられている *tokonoma* の用例文のうち、初めの 2 例がこの短い形をしている。初例は『日本誌』からの引用で、“In the solid wall of the room there is allways a *Tokko*..or a sort of a cupboard, raised about a foot..above the floor, and very near two feet deep.” [部屋のしっかりとした壁にはいつも床の間、つまり一種の棚がある。1 フィートほど床より高くなっており、2 フィート近くの奥行きがある。] である。『日本誌』ではこの他にもケンペルが案内された様々な客間に関する描写に現れる。

第 2 例は “Two cakes..which are placed as an ornament within the *toko*.” (I. Titsingh, 1822, *Illustrations of Japan: Consisting of Private Memoirs of the Djogouns*, trans. by F. Shoberl) [床の間に飾りとして据えられている 2 つの餅。] となっている。

### 3・67 Torij, Tori, Toori (torii)

鳥居。神社の参道の入り口などで、神域と俗界とを区劃する結界であり、神域を象徴する一種の門。神仏習合の影響で仏教寺院に見られる場合もあり、逆に随神門をもつ神社もあるが、一般的には神社を象徴するものとされ、現在の地図記号等では神社を意味している。2 本の柱の上に笠木 (かさぎ) を渡し、その下に貫 (ぬき) を入れて柱を固定するのが基本型である。日本三鳥居と云えば「銅の鳥居」(吉野・金峯山寺)、「朱丹の大鳥居」(安芸・厳島神社)、「石の鳥居」(大阪・四天王寺) であり、いずれも重要文化財に指定されている。

OED には *Suppl. 1* から採録され、*Suppl. 2* で幾らか改訂されている。最終的に、第 2 版では 7 つの用例文が提示されている。その初例は『日本誌』より “At the entry of the walk, which leads to the temple, stands..a particular fashioned gate, called *Torij*, and built either of stone or wood.”

[神殿に到る小道の入り口には、鳥居と呼ばれる石造か木造の独特な作りの門が立っている。] である。

『日本誌』の綴りにおいて、この語の最後の文字が *i* ではなく *j* になっているものがある。しかし、これはケンペルの時代の正書法においては全く不思議なことではない。*i* と *j* とはもともとと同じ文字の異形で、分化しはじめたのも 17 世紀以降であり、19 世紀になってもまだ混同されていたのである。この点に関しては、Barber (1993: 36)、Crystal (2003: 260)、Upward (1992)、Vallins (1965: 77) など多くの文献があるので、ここで詳しく論じないことにする。

### 3・68 Tsja, Tsjaa (cha, chia)

茶。ツバキ科ツバキ属の常緑低木で、温かい土地に自生する。中国の霧の多い山岳地帯が原産地とされる。若葉や新芽を摘んで飲料用に製するため、アジア一帯で広く栽培されている。飲用にされるものは、その醗酵の度合いや製法により様々な種類がある。宇治や静岡は有名な産地である。

中国語からの借用の可能性も強いが、日本語説も否定できないため、ここで取り上げるようになった。実際にどちらの言語から英語に借用されたのかは、様々な研究があるのだろうが、それはここでは考えないことにする。

OED には初版から採録されている語であるが、各版で改訂されている。第2版では、16の用例文が3つの見出しの下に挙げられている (*cha, chah* に11例、*chia, n.*<sub>1</sub> に3例、*char, n.*<sub>6</sub> に2例)。これらのうちの最も古い例は “Water mixt with a certaine precious powder which they [the Japanese] use, they account a daintie beverage: they call it Chia.” (G. Botero, 1601, *The Travellers Breviat*, trans. by R. Johnson) [日本人が使う特定の貴重な粉末が混ぜられた水で、彼らは美味な飲料を成す。彼らはそれを茶と呼ぶ。] である。

『日本誌』では、旅行記の部分に1回見られる他、茶の栽培や飲み方を説明した附録の文中に数回出現する。一例を載せておく。 “Some people also were busy about plucking off the *Tsja*, or tea leaves, which they did so effectually, that nothing was left on the shrubs but the meer stalks.” [茶の葉を摘むのに忙しくしている人たちもいた。とても効率良く摘むので、茶の木には茎柄の他は何も残っていない程である。]

### 3・69 Tsubo (tsubo)

坪。尺貫法の面積の単位で、6尺平方。主に家屋や敷地の面積に用い、耕地や林野では同じ面積を歩(ふ)で示す。「度量衡法」(明治24年法律第3号)で<sup>100</sup>/<sub>3025</sub>アールと規定されている。この法律は、「メートル条約」(明治19年4月20日勅令)への加盟により、メートル原器・キログラム原器が1890年(明治23年)に日本に到着したのを受けて、それまでの「度量衡取締条例」(明治8年太政官達第135号)を継承する形で制定されている。坪や歩は他の尺貫法単位と共に旧「計量法」(昭和26年法律第207号)の施行によって廃止された。

OED には *Suppl.* 2 から採録されており、第2版にもそのまま引き継がれている。用例文は3例で、その初例は『日本誌』より “Woods and forests pay a..Ground-rent, which differs according to the number of *Tsubo*’s, and the goodness and fruitfulness of the soil.” [森林に対して支払

う借地料は、その坪数や土壌の良さや肥沃さによって違っている。] である。

坪には「屋敷内の建物と建物の間や、壁などに囲んで造った小さな庭」の意味もある。壺庭とも表記される。OED にこの語義の記載はない。『日本誌』では、例えば “The *Tsubo*, or garden behind the house, is also very curiously kept for travellers to divert themselves with walking therein, and beholding the fine beautiful flowers it is commonly adorn’d with.” [家の裏にある庭である坪も、客がその中を歩いたり、しばしばそこに植えられている上品で綺麗な花を眺めたりして楽しめるように緻密に設えられている。] のように、こちらの意味での坪も使われている。

### 3・70 Tuffon (typhoon)

颱風。北太平洋西部の海上に発生する熱帯低気圧で、現在では最大風速が毎秒17.2メートル以上のものをいう。8月と9月の発生が多い。近代の基準ができる前には、同じような暴風を颱風と呼んだ。OALD<sup>8</sup> (2010) には、 “A violent tropical storm with very strong winds” [とても強い風の吹く猛烈な熱帯性の嵐] とある。

台風とも書かれるが、これは「同音の漢字による書きかえ」(昭和31年7月5日国語審議会報告)による表記であり、正しくは颱風と書くものである。また、語源に関しても諸説があり、日本語からの借用でないことも考えられるが(中国語語源とするのが有力で、OED もそうしている)、ここではその可能性のあるものとして取り上げることにした。

OED の定義は「a. インドで発生する猛烈な嵐や暴風。(† 時に他所のものに関してもいう。) b. 中国の海やその周辺海域で発生する猛烈な低気圧性の嵐や暴風で、主に7月から10月の間に発生する。」である。OED において、剣標(†)は廃れた語や用法を示す記号である。挙げられている *typhoon* の用例文のうち、中国語-日本語からの借用と思われるものは14例あり、その初例は “The violent Storms, called Tuffoons, (Typhones)” (W. Dampier, 1699, *Voyages and Descriptions*) [颱風と呼ばれる猛烈な嵐。] である。

『日本誌』には附録第2に以下のように1回出ている。附録第2と云うのは、1673年に日本へ来た英国商船の航海日誌からの抜萃転写である。

These two last nights we had much wind and rain, and so excessive violent, that it was rather a Tuffon, than a storm, coming from the mountains in such violent gusts upon us, that although we ride with our best and small bower in the river where no sea goes,

it being a mile round, both our anchors came home, and we were forced to let go our sheet anchor, the wind veering from the S. to the S. S. E. and S. E. but blessed be God we suffered no damage. [一昨晚、昨晚はとても風が強く、大雨が降った。極端なまでに激しく、ただの嵐というよりも颱風である。我が船の上にあまりにも激しい突風が山から吹き降ろしてきたので、最善を尽して操船し、海に面していない川にある周囲 1 マイルほどの繫留池に停泊したにも拘らず、走錨して非常用大錨を下ろさざるを得なくなった。風向きが南・南南東・南東と変わったが、神のご加護により被害は免れた。]

### 3・71 Udsigami (ujigami)

氏神。同じ地域に住んでいる人々が共同で祀る、その土地の人々を守護する神。また、国・街・城・宮殿など、一定の地域や建造物を護るために祀られた神。もとは、氏族が神として祀った祖先、あるいはその氏と縁故のある神のことであった。

OED には *Suppl. 2* から採録され、その定義は「封建時代の日本で、氏の先祖神。後に、その村や地域の守護神。」となっている。用例文は 3 例が挙げられており、その初例は “The peasants were going to celebrate their harvest by a dance in the court of the *ujigami*.” (L. Hearn, 1897, *Gleanings in Buddha-Fields: Studies of Hand and Soul in the Far East*) [農民たちは収穫を氏神の境内での踊りで祝うつもりだった。] である。

『日本誌』には、長崎の街の描写に “*Udsigami*, is the chief God, Saint and Protector of a Province, City, or Village.” [氏神というのは、国・町・村の主神・守護聖人・守護神のことである。] とある。旧仮名遣いの「うちがみ」を示すかのように、綴りが *dsi* になっている。

### 3・72 Urusi (urushi)

漆。ウルシ科ウルシ属の落葉高木。アジア原産で、中国大陸・朝鮮半島・日本で古くから栽培されている。アレルギー性接触性皮膚炎を起こしやすいことで有名で、「職員の災害補償」(人事院規則 16-0) でも「うるしにさらされる業務に従事したため生じた皮膚疾患」は公務上の災害と認められている。実からは蠟が採取される。乳状の樹液から水分を蒸発させ、油や顔料を加えたものも「うるし」と呼ばれ、塗料に用いられるが、これは乾燥すると硬い膜を作り、水や酸に強い。

OED には *Suppl. 2* から採録されている。5 つの用例文が挙げられており、その初例は “1727 [see *Japan varnish (tree)*].” となっている。この意味は、*Japan varnish (tree)*

の項目の下にある 1727 年の用例を見よ、ということである。その *Japan varnish (tree)* は親見出し *Japan* の下にある連語であることが、斜体によって表されている(親見出し語への参照は、フォントサイズを下げた大文字で表される)。問題の 1727 年の用例文は『日本誌』より “The *Urusi* or *Varnish-Tree* is another of the noblest and most useful Trees of this country.” [漆の木は日本で最も立派で有用なもう一つの木である。] で、これは日本の植物に関して論じた部分からの抜萃である。

### 3・73 Uta (uta)

歌。古くから日本で創作されてきた韻文で、中国詩の漢詩に対して日本の詩文をいうもの。5 モーラと 7 モーラを基礎単位として構成される。長歌・短歌・旋頭歌など、様々な形式があるが、現在では 5-7-5-7-7 の 31 モーラからなる短歌を指すのが一般的である。また、それらの韻文に節をつけた歌謡。

OED には *Suppl. 2* から採録されており、用例文は 3 例が挙げられている。その初例は “He found out certain words which he brought together into an *Uta*, or verse.” (R. Hildreth, 1855, *Japan, as It Was, and Is*) [彼は一定の言葉を見つけ出し、それを繋ぎ合わせて一首の歌、つまり詩を詠んだ。] である。

『日本誌』には旅行記に 2 回出現している。そのうちの 1 例を示しておく。 “After dinner they desir’d to see our hats, swords, tobacco-pipes and watches, which were carried out of the room, for there were no ladies present at this audience, and consequently no *Uta*, or dance.” [食事の後、彼女らは我々の帽子・剣・煙管・時計などを見たがり、それらは部屋から持ち出された。というのも、この謁見の場には女性たちは居なかったからである。従って、歌もなく、踊りもなかった。]

### 3・74 Wakisasi (wacadash)

脇差。日本刀の種類のひとつで、刃渡り 30 センチメートルから 60 センチメートルのもの。侍の 2 本差しの刀のうち、短い方。3・20 項 (*Katanna (katana)*、拙稿 2011) も参照。

OED には初版から採録されている。5 つある用例文のうち、初例は “He had given her his *wacadash* or little cattan.” (W. Eaton, 1613, letter; printed in W. Foster ed., 1897, *Letters Received by the East India Company*) [彼は彼女に自分の脇差、つまり小さな刀を与えてあった。] である。

『日本誌』では山伏の装備品に関する記述に 1 回現れ、 “*Wakisasi*, a Scimeter of *Fudo*, which they wear stuck in

their Girdle on the left side. It is somewhat shorter than a *Katanna*, and kept in a flat sheath.”〔脇差は不動明王の短刀であるが、彼らはこれを帯の左側に差し込んで身に付ける。刀よりは幾分か短く、平らな鞘に収められている。〕とある。

OED の最新例は 1620 年になっており、この後の例が挙げられていないのは何故かという疑問がある。さらに新しい用例文が採り上げられていれば、*wacadash* のような不思議な見出しにはならなかっただろう。『日本誌』における綴りは実際、現在のローマ字規範に近いものとなっている。日本文化ブームの中、侍や忍者がマンガとなって欧米でも活躍する今、脇差も様々な文献に取り上げられているのではなかろうか。書籍版の辞典に「最新の」用例文を載せることを期待するのは無理であるが、少なくとも 1620 年よりは新しい用例文は複数見つかる筈である。

#### 4. まとめ

『日本誌』と OED との双方に出現してる日本語 74 語について、3 回に亘って見てきた。江戸時代の日本が西洋人にどのように映っていたかという事について、その一端を垣間見れたのではないだろうか。OED の扱いに問題のある語も多くあったように思われる。『日本誌』よりも OED の初出年が新しい語も存在しており、現在進行中の改訂作業において改められることが望まれる。

なお、本稿中、百科事典的な事項は『ブリタニカ国際大百科事典』(1988) からの情報を援用している。また、OED の版による内容の変遷は 東京成徳英語研究会 (2003, 2004) からの情報に依っていることをここに付記しておく。(東京成徳英語研究会 (2004) は 東京成徳英語研究会 (1995–1998) を再編したものである。) (完)

#### 参考文献

Barber, C. (1993) *The English Language: A Historical Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.

『ブリタニカ国際大百科事典』(1988) 第 2 版. 東京: ティビーエス・ブリタニカ.

Crystal, D. (2003) *The Cambridge Encyclopedia of the*

*English Language*. 2nd ed. Cambridge: Cambridge University Press.

『大辞林』(1995) 第 2 版. 東京: 三省堂.

Doi, S. (2010) ‘Japanese Loanwords in the *Oxford English Dictionary* and in the English version of Kämpfer’s *the History of Japan*’. In T. Fujita, S. Suzuki, & N. Matsukura (eds.), *the Future of English Studies* (pp. 84–99). Tokyo: DTP Press.

土居 峻 (2011) 「『日本誌』及び『オックスフォード英語辞典』の双方に現れる日本語」. 『愛知工業大学研究報告』46: 31–42.

土居 峻 (2012) 「『日本誌』及び『オックスフォード英語辞典』の双方に現れる日本語(2)」. 『愛知工業大学研究報告』47: 85–96.

Kämpfer, E. (1728) *The History of Japan* (J. G. Scheuchzer, trans. & ed.). 2nd impression. 2 vols. London. (Facsimile reprint published in 1977 by Yushodo Booksellers, Tokyo)

[OALD<sup>8</sup>] *Oxford Advanced Learner’s Dictionary of Current English* (2010) 8th ed. Oxford: Oxford University Press.

*The Oxford English Dictionary Second Edition on CD-ROM* (2002) Version 3.0 for Windows. Oxford: Oxford University Press.

曹洞宗宗務庁 (1992) 『仏教概論：わかりやすい仏教』. 東京: 曹洞宗宗務庁.

東京成徳英語研究会 (編) (1995–1998) 『西洋の日本発見：OED に見られる日本語』. 第 1 集～第 7 集. 東京: 東京成徳短期大学.

東京成徳英語研究会 (編) (2003) 『西洋の日本発見：OED Additions Series』に見られる日本語. 東京: 東京成徳短期大学.

東京成徳英語研究会 (編) (2004) 『OED の日本語 378』. 東京: 論創社.

Upward, C. (1992) ‘J, j’. In T. McArthur (ed.), *the Oxford Companion to the English Language* (p. 538). Oxford: Oxford University Press.

Vallins, G. H. (1965) *Spelling* (D. G. Scragg, rev.). London: Andre Deutsch.

(受理 平成 25 年 3 月 19 日)